

▶ 青少年健康センターが 昨年30周年を迎えました	1
▶ 記念講演	2
▶ 懇親会	3
▶ 寄稿	4
▶ 30年の歩み	5
▶ 30周年ご寄付の方々	6
▶ ご寄付に感謝報告	7
▶ Center News	8

青少年健康センターが 昨年30周年を迎えました

去る平成27年11月22日（土）午後13時30分から千代田区の学士会館にて、創立30周年記念式典が開催されました。司会は法人管理部長鈴木隆之。

最初に当センター会長の齋藤友紀雄より開会の式辞がありました。

「1985年、当センター創立者稲村博は思春期病理を専門とする精神医学者でしたが、臨床経験から若い人たちが深刻な事態にあることに気づき、彼の呼びかけで宿泊のできるハウスを作り、青少年健康センターが設立されました。1990年にはその実績が認められて社団法人となりました。デイケアの「茗荷谷クラブ」は1995年に若者の居場所として発足し、今日に至っております。30年間には「思春期カウンセリング講座」、「実践的ひきこもり対策講座」、「講演会・シンポジウム」なども開設され継続しています。さらに2012年からは若年層の自殺予防目的の「クリニック絆」を創設し現在に至っています。2014年に公益社団法人格を取得すると同時に、世田谷区から大型の事業委託を受けました。「メルクマールセタがや」と称するデイケア施設が設置され、この運営を託されました。現在「メルクマールセタがや」と「茗荷谷クラブ」で登録されているひきこもりの若者たちの総数は現在150名を超えています。また文京区からは「ステップ」と称する若者支援事業の委託を受けるようになりました。

こうした中で30周年記念の年を迎えることは、まことに喜ばしいことです。若いスタッフたちの仕事が増えたことはうれしいのですが、法人の運営はなかなか厳しい面も多々ありますので、これからも引き続き努

力する所存です。ここに至るまでの皆さまのお力添えに感謝申し上げますとともに、今後ともご支援とご指導を賜りますようお願い申し上げます。

次に保坂展人世田谷区長から「このたび若者たちの相談や居場所を提供するために「メルクマールセタがや」の運営をお願いすることになり、1年が経過しました。統計的にみると、132のケースを受け付け、延べ1500件の相談となっています。居場所には延べ27人が来所し、860回の利用状況で、順調に運営されています。青少年健康センターには立ち上げからお世話になり、運営していただきお礼申し上げます」とのご挨拶がありました。

続いて福田貴代子元首相夫人から「関係者の皆さま、センター創設のご苦勞はいかばかりであったかと推察いたしました。センターのお陰でこころの拠り所を作られた方が多いのではないのでしょうか。この30年間のご努力は、マスコミの呼びかけで一般の人々の共感を得られてきたと思います。さらにもっと皆さんを知っていただき、困難を抱える本人やご家族が減っていくことを祈っております」とのお励ましをいただきました。

さらに山崎美貴子東京ボランティア市民活動センター所長（前神奈川県立保健福祉大学長）から「貴センターでの30年の実績が、世田谷区や文京区などのお



神田・学士会館での創立30周年式典

仕事につながっていると思います。齋藤先生の“いのちをつむいでいこう”という思いやお力添えで公益社団法人にもなられたと思います。今後も個別の支援で、“いのちは何よりも大事”と一步一步ご活躍され、大きな力を発揮されることを祈っております」との励ましがありました。



保坂世田谷区長



福田元首相夫人



山崎教授

この後、感謝状の贈呈式があり、創立当初資金面で大変お世話になった元千代田化工建設株式会社社長玉置正和氏に贈呈されました。なお、元事務局長・常務理事故監物和夫氏への感謝状もご遺族に追って贈呈される予定です。引き続き玉置氏より「早いもので30年になりましたか。当時、稲村博教授と家庭内暴力やひきこもりといった青少年の諸問題について話をしましたが、そのための治療や支援目的で、横浜に「ハウス」と称する施設を設置しました。さらに、茗荷谷に私が持っていた小さなマンションを事務局設置のため提供しました。爾来いろいろなことがありましたが、あらためて昔日の感があります。故人となられた監物理事、佐藤事務局長の懸命なご努力により、公益社団法人として認知されたと思います。ここにセンターが社会的にも大きく知られるようになった今、齋藤会長以下、全員の力で頑張っておられることと思いますので、一段とところを引き締めてより一層業務を



感謝状の贈呈を受ける玉置正和元会長（右）

広げて、大いに成績を上げられ、来る40年、50年を迎えられることを祈っております」とのご挨拶がありました。

最後に事務局長時盛昌幸から「今春から就任しました。法人は財政的にも厳しい面もありますので、今後も皆さまのご支援を賜りながら全職員の協力で託された事業を継続していきます」との閉会の辞を持って式典は終了しました。

記念講演

「私たちのいのちとところ」(要旨)

東大名誉教授・生命学者

安楽 泰宏 先生



今日は大変重いテーマのお話ですが、今後のセンターの躍進に向けて、皆様ますますお元気になれることを思っており、お耳をお貸し下さい。

最近、生命科学の知識に基づいていのちを模索することが顕著になってきました。“いのち”と“ところ”はそれぞれどのような役割があるのでしょうか。“いのち”は生命であり、人生、生活です。“ところ”は、知性、感性、意志統合でしょうか。これに記憶と学習の操作、経験が加わり、その上にそれらを全て総括する意識の成立によって誕生するのではないかと考えています。こころは言語と行動を通して表現され、認知されるものです。“いのち”と“ところ”に関わる原点という複雑で深い問題について、ご一緒に考えてみたいと思います。生命科学としては、一貫してエネルギー代謝の研究をしています。人の体重1g当たりの熱量生産量はおよそ10calで、これは太陽に比べて1万倍も大きい。つまり太陽よりも燃えさかっているのが“いのち”です。私は生命にこのエネルギー代謝の研究を通して、“いのち”の温かきもの、愛おしきものに触れるのです。

「病める子を 抱き上げる時 伝い来る 熱を命の営みと思う」(篠原俊則) は病と闘ういのちの営みを詠っています。

「いのちある人 あつまりて 我母のいのち 死行く
を見たり 死ゆくを」（斎藤茂吉）は医者としてではなく、
死ゆく母を見つめています。

アンリ・ベルグソンの哲学では、「人間とは何か」と
問いかけています。彼は「無から生物が生まれ、物質
から生命が生まれ、生命からこころが生まれた」と言
い、さらに「人間は何のために、どこから来て、どこ
に行くのか」と問いかけています。また、画家アンリ・
ポール・ゴーギャンがタヒチで描いた大作「楽園」でも、
「人はどこから来て、どこへ行くのか、人間とは何か」
を誕生から死に至るまでを一つの絵で表現しています。
一人ひとりが「奇跡の生命」を持つ存在であり、今でも、
これからも二度と生まれえない「貴重な存在」です。

沖縄の言葉で言えば、「命どう宝（ぬちどうたから）」
です。いのちを慈しみ、こころをはぐくみ、こころを
愛でましょう。こころに対する決意として、「私たちは
生命 こころを育みます こころが守ります」。

これをもって、私の結びの言葉と致します。

（文責：編集者）

懇 親 会

式典会場から移動して、懇親会が開かれました。ス
ナップで楽しいひとときを再現しました。



30周年記念懇親会



玉置元会長（右）及び千代田化工から
出向した元理事たち



長年に亘る協力に感謝する齋藤会長



創立以来の協力者・筑波大学出身の精神科医たち



講師の方々とスタッフ



日精研元総長高橋清久氏（左）



世田谷区
「メルクマールせたがや」
のスタッフ

青少年健康センター (Youth Support Centre) は三区を駆け抜けた

元常任理事 角田 忠之

青少年健康センター (Y S C) は昨年末、創立30周年を学士会館で多数の関係者参列の下でお祝いすることが出来た。設立当初から今までを知る者の一人として、感慨一入の思いである。今年も既に青学の2連勝で終わった箱根駅伝のファンの眼で見ると、Y S Cのタスキを繋いで、つないで、やっと、三区の中継所を何とか、無事駆け抜けた情景を、特に感慨をもって観る想いである。

振り返れば、一区の10年間は、当然のことながら、スタートから苦難の連続であったが、多くの顔、顔が外の世界に移ってしまっていて、その中身を語り合う事が残念ながら出来ない。そこで、私が勝手にその幾つかを思い起こしてみることにする。

まずは、事業の基になる資金の苦である。第一走者の稲村先生は千代田化工建設の玉置社長と昵懇の仲にあって、Y S C設立の意義を熱く、訥々と訴えられた。玉置氏は大いなる感動を覚えられ、企業のメセナ活動の一環として、支援していくことを決断された。早速、社内に専属のプロジェクトチームを立ち上げ、事業計画が作られた。アメリカに調査団が派遣され、帰国後、施設計画、土地探しと順調に歩み始めた。併せて、北の丸クリニックと北の丸カウンセリングセンターを千代田の資金援助で開院・開業させているが、この早期発足はチームの企業人らしい戦略に基づくものであった。クリニックの名称についても思い出がある。昭和60年(1985年)前後の話だ。

一方、事業の母体となる組織作りと法人化も平行して進められていった。法人格については社団法人ではなく、財団法人が妥当だという判断をした。千代田からの資金援助が数億円期待できると見込んでいたからである。

法人化に向けての会議を数回、将来理事職に名を連ねて頂く高名な先生方の出席の下で行った。多忙な方々を集める苦勞だけが今でも鮮明に記憶にある。

そうこうするうちに、オイルショック後の、世界経済の不安定さが千代田の経営にも強く影響するようになり、期待した資金援助の目処が危うくなってきた。土地の確保、施設建設の目処、法人化に必要な資金確保、などなど。暗礁に乗り上げるようになってきた。一区の前半は平坦から突然、急坂の難所に差しかかって終わった。新国立競技場計画やエンブレムと同じく、「産みの苦しみ」が待っていたのである。

後半の走りはもう無理ではないかと思われたが、何とか三区までタスキがつながり、無事に創立30周年を迎えることができました。今後も順調な走りを期待したい。

青少年健康センターの歩みから思うこと

理事・思春期カウンセリング講座担当 藤堂 宗継

青少年健康センターが30周年をむかえた。長いような短いような30年に感じられる。私は、初めから関わりを持っているので変化し、発展してきた部分を感じる。特に思春期カウンセリング講座を担当しているので、その変化も大きい。初めは、思春期カウンセラー養成講座という名称であった。始まった当時は今のように「ひきこもり」に関する施設や組織はなかった。

講座の役割は、登校拒否、不登校に陥っている若者を支援していくことを考え、そのための理論と援助の実際を伝えていくことだった。対人援助の仕事についている人も参加し、これからその役割を行いたい人も大勢いた。また、自分の身内に不登校の子供を持つ人もよりよい対応を学ぶために参加した。

当時は登校拒否という呼ばれ方がまだみられ、それが不登校、そして時を経てひきこもりというように変化した。それは問題を抱える若者の変化もあるが、そういう若者をどのように社会が見ているかということも影響している。まだまだ良い学校に行く、良い仕事に就くということが価値が大きいと思われていた。その方向へ向かわないで学校へ行けないことは大変な問題と思われていた。それに加え、思春期特有の親離れ、自立、自分の確立という問題を抱えて、苦悩していた若者を少しでも救う機関として、健康センターは大きな力となっていた。

その後の社会は、個性と自己主張を認める方向に動き、学校へ行けないことはその前の時代に比べ鋭く迫られることはなくなった。しかし、問題はそれで解決したのではなく、自分の考えと、周りの期待の間に葛藤をおこし、その葛藤の処理は困難な場合がある。

いろいろな時代に若者たちが示す問題は社会情勢に影響を受けて表すものは変化している。しかし、その中心となっているものはおそらく同じように思われる。それは自己の確立と自立に関する問題だと言えるだろう。それがうまくいかずにひきこもりになっている若者に対する援助は、青少年健康センターの各部門が確立してきたやり方が効果的である。同じような組織や活動があちこち見られるが、30年の時間の中で蓄積された英知は大きなものであると言えるだろう。今後の青少年健康センターの発展を期待したい。

公益社団法人 青少年健康センター

30年の歩み

年	月	出来事
1984年	12月	青少年健康センター構想、趣意書作成
1985年	3月	青少年健康センター構想、新聞掲載
	10月	青少年健康センター発起人会（代表平野龍一氏）
1986年	6月	News Letter No.1 発行
	9月	支援の会設立総会
	11月	家族グループカウンセリング開催 「支援の会だより」創刊第1号
1987年	1月	公開講演会「思春期病理の現状と治療について」
	4月	カウンセラー養成講座開設
	5月	青葉台ハウス開設
	6月	公開講演会「登校拒否と無気力問題」
1988年	1月	ひきこもり居場所支援の「茗荷谷クラブ」開設 青少年健康センター設立総会 第1回理事会
	5月	講演会「登校拒否について」
	9月	鶴見ハウス開設
	11月	第1回家族相談会開催
1989年	7月	「青健シリーズ」発刊
1990年	6月	第1回シンポジウム「21世紀に向けての青少年の育成」
	9月	社団法人 青少年健康センター設立総会
1991年	10月	青少年健康センター 社団法人設立許可取得
	3月	講演会「ニューセラピー・青少年への包括的アプローチ」 第1回社団法人通常総会
	7月	麒麟記念財団より研究助成金受給決定
1992年	9月	相談的家庭教師派遣 事業開始
	11月	池上ハウス開設（鶴見より移転）
	4月	日本自転車振興会より補助金交付決定
1993年	7月	若者メンタルヘルプライン 事業開始
1994年	12月	ビル清掃アルバイトチーム 事業開始
	10月	会員企業に対し電話相談・面接相談開設
1995年	7月	玉置夫妻よりハウス活動用としてワゴン車1台寄贈
	11月	創立10周年記念シンポジウム「21世紀の青少年問題—その展望と課題」 創立10周年記念式典開催
1996年	5月	稲村博副会長逝去 齋藤友紀雄副会長代行就任
1997年	8月	保土ヶ谷ハウス開設（池上より移転）
1998年	5月	実践的ひきこもり対策講座 開講

年	月	出来事
1999年	10月	トヨタ財団より「青少年の社会的ひきこもりの実態・成因・対策に関する実証的研究」に対し助成決定
2000年	6月	齋藤友紀雄理事 副会長就任
	9月	自立サポートセンター「小日向ハウス」開設
2001年	6月	安田生命社会事業団より事業助成金受給決定
	7月	三菱財団より「不登校・ひきこもりなど青少年の社会不適応への治療対応に関する研究—宿泊療法を中心に—」に対し助成金受給決定
2002年	1月	NHK「ひきこもりサポートキャンペーンネット相談室」開設委託される（2006年まで）
	2月	社会参加準備グループ 事業開始
2003年	4月	社会福祉医療事業団より「インターネットによるひきこもり対策事業」に対して助成金受給
2004年	7月	平野龍一会長逝去
	11月	会長に副会長齋藤友紀雄氏、副会長に佐藤悦子常任理事が就任
2005年	10月	財団法人原田積善会より書籍「社会的ひきこもりへの援助—概念・実態・対応についての実証的研究」に対して助成金受給決定
2006年	3月	(財)東京メソニック協会より茗荷谷クラブへの助成金受給決定
	7月	明治安田こころの健康財団より「NHK ネット相談データ集計」のテーマに対し助成金受給決定
2007年	1月	齋藤友紀雄会長に対し、自殺予防の電話相談全国展開の功績を表彰する朝日社会福祉賞決定
2010年	5月	佐藤悦子副会長逝去、関川俊男常任理事が副会長に就任
2011年	12月	内閣府主催「いきづらさを抱える子ども・若者に寄り添う」に登壇
2012年	3月	青少年自殺予防のための電話・面接相談「クリニック絆」開設・東京都ひきこもり等若者支援プログラム事業 登録団体認定
	11月	齋藤友紀雄会長 保健文化賞及び藍綬褒章受章
2014年	4月	公益社団法人への移行認可・文京区より「ひきこもり等自立支援事業」の業務委託・世田谷区より「世田谷区若者総合支援センター運営業務」の業務委託
2015年	10月	講演会・シンポジウム「オープンダイアログ」開催
	11月	創立30周年記念式典開催

創立30周年記念式典寄付者の方々

(アイウエオ順・敬称略)

この度は記念式典事業にご寄付をいただき誠にありがとうございました。総件数107件、総額1,206,000円のご寄付をいただきました。これもご支援いただきました皆様のお力があってと考えております。

以下に、ご寄付をいただいた方の氏名を記載させていただきます。寄付金につきましては、皆様の意向に沿い、式典運用費用を含む30周年記念事業に使用させていただきます。

今後とも青少年健康センターへのご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

蘆名	みさお	川島	隆	鈴木	義則	日高	正枝
荒木	均	河野	子	関川	俊男	廣田	光司
井内	紀代	菊池	治	関田	員清	福山	なお
糸井	藤子	北畠	ま	高橋	清龍	藤光	純一郎
池田	淑子	日下	忠	高山	裕	藤井	幸子
石川	芳子	倉本	英	高館	泰	田井	忠代
石村	愛子	倉林	る	千葉	秀	野田	貴光
稲村	優子	栗原	実	千堤	忠	澤古	悦子
今村	郁子	小枝	勲	角津	恵	不破	幸
井元	津賀	小西	香	角津	悠	本真	るみ
岩佐	壽夫	小林	光	拓志	隆	松元	テ
岩崎	哲也	小松	和	土田	継	山本	敦
鶴塚	健吉	小谷	ひろ	藤堂	真	丸山	寿美
榎本	美津	斎藤	光	東戸	み	三宮	邦
生出	美子	齋藤	友	中中	聡	毛	蓉圭
大塩	志づ	原木	信	永西	弘	望	馨
大島	芳子	藤田	ユ	西村	子	柳	三四
大山	俊介	田村	晶	西村	生	山下	千
小川	栄子	井川	厚	西田	郎	本	弘
岡内	泰子	原山	康	二能	代	山	万
奥山	孝子	杉木	徳	波多	子	横	晴
香取	都美	菅原	恵	早野	穂	吉	野
各務	仁真	山木	一	原田	美子		
各務	達		建		子		
金子	寿		子		子		
金光	順		一		子		
			二		子		

匿名3名

大分いのちの電話

千葉いのちの電話 (友田直人)

社会福祉法人高齢者福祉施設神楽坂

東京YMCA (廣田光司)

東京つくし会 (真壁博美)

世田谷区発達障害相談療育センター(沼倉 実)

ご寄付に感謝報告

(平成27年4月～12月)

青少年健康センターは大勢の個人の方々のご献金、および助成団体はじめ会社などの助成金・ご寄付、補助金などによって支えられています。ここにこころから感謝申し上げてご報告いたします(敬称略)。

【正会員】

稲村 優子	今村 郁子	井利 由利	岩佐 壽夫
叶 香代	河野 治子	菊池 章	日下 忠文
倉島 徹	倉本 英彦	小松 淳平	齋藤 英子
齋藤 務	齋藤友紀雄	笹原信一朗	菅原 健
鈴木 光代	関川 俊男	高橋 清久	高山 智
角田 忠之	中島 聡美	西村 秋生	馬場 謙一
日高 正枝	藤光純一郎	福田貴代子	真下 テル
宮田タマ恵	米沢 宏		

計600,000円

【維持会員】

秋葉真知子	糸井 藤子	伊藤 誠子	伊藤 三恵
榎本美津恵	遠藤幸代子	小鹿 敏夫	生出 美穂
國頭暉一郎	黒石美江子	小島 弘子	小西 香里
佐藤 悦子	鈴木 邦一	堤 千里	徳江 逸子
戸村みどり	西村 四郎	原佐 恵子	藤井 幸子
丸山 邦子	松本 透	三村 蓉子	山本 弘夫
渡辺 彰子	渡部実知子		
匿名希望			

計600,000円

【SW会員】

SW会費のみ 計170,000円
SW会費+維持会費 計790,000円

【寄付・個人】

阿部嘉生留	安楽 泰宏	飯島 隆輔	石村 愛子
伊豆 邦子	井出 道子	稲村 優子	落合 裕子
小野田欣子	檜浦 正臣	檜浦三世子	小宅 康夫
鈴木 隆之	鈴木四与二	志村よう子	高山 智
玉置 正和	千葉 泰子	津田 菊枝	堤 秀幸
角田 忠之	野村 和正	波多野瑞穂	花井 一代
藤井 忠幸	藤田 和子	松本 透	
匿名希望			

計1,458,000円

【寄付・団体】

ウエスト東京ユニオンチャーチ
毎日新聞東京社会事業団
大分いのちの電話

計330,000円

ご支援のお願い

青少年健康センターは皆さまの尊いご寄付によって支えられています。これまで当センターをご支援下さった多くの方々、また企業団体の皆さまに心から感謝申し上げます。昨年4月に公益社団法人に移行し、税法上の寄付金特別控除ができるようになりました。この機会に一層のご支援を賜りたく、ここにお願い申し上げます。

本事業の目的に賛同し、支援して下さる会員を随時募らせていただいております。

○正会員 年会費

①個人 20,000円 ②法人 50,000円/年

○維持会員 年会費個人 10,000円

また一時の寄付でも結構です。

(会員には当センター企画の講座などに優先的にご案内、割引など優遇いたします)

○寄付金振込先

①郵便振替(添付用紙の場合、振込料は無料)

00180-6-546682

②みずほ銀行 池袋支店 普通 2837720



創立30周年の記念品

Center News

平成27年

5月

- 日本メイスン財団・子供まつり参加 17日
- 青少年健康センター理事会 27日
- 基礎講座 前期 藤堂宗継先生（歌舞伎町メンタルクリニックカウンセラー 臨床心理士）27日から5回
- 実践的ひきこもり対策講座 24日
講師：斎藤環先生（筑波大学教授 センター参与 精神科医）

6月

- 青少年健康センター会員総会 10日
- 実践的ひきこもり対策講座 14日

7月

- 理論講座 前期 「人のこころを理解するためにパーソナリティを考える」 17日、22日、29日
講師：藤堂宗継先生 於東医健保会館
- クリニック絆 研修会 23日
- 実践的ひきこもり対策講座 18日
午前：理論編（文京区主催） 午後：家族会 於シビックセンター

8月

- 家族宿泊セミナー（実践的ひきこもり対策講座）
22日～23日 講師：斎藤環先生 於リフレフォーラム

9月

- 内閣府自殺対策会議 4日
齋藤友紀雄会長 青少年健康センターの自殺対策を報告

- 実践的ひきこもり対策講座 23日 於筑波大学
- クリニック絆 研修会 29日 講師：倉光洋平氏

10月

- 特別体験講座 中期 「日常生活に活かす心理学～誕生から死まで～」 3日（午前・午後）、10日
講師：近藤卓先生（山陽学園大学教授 日本のいのちの教育学会会長） 於センター
- 基礎講座 中期 藤堂宗継先生 14日から5回
- 実践的ひきこもり対策講座 17日 午前
- 講演会とシンポジウム 「オープンダイアログ（フィンランド発の“対話による治療”）」 17日 午後
シンポジスト：斎藤環先生
野口裕二先生（東京学芸大学教授）
信田さよ子先生（原宿カウンセリングセンター所長）
向谷地生良先生（北海道医療大学教授）
於筑波大学講義室

11月

- 理論講座 中期 「ひきこもり家族のライフプラン3」
5日、12日 講師：村井栄一先生、畠中雅子先生（ファイナンシャルプランナー）
- 実践的ひきこもり対策講座 21日
午前：理論編（文京区主催） 午後：家族会 於文京区大原地域交流センター
- 青少年健康センター創立30周年記念式典及び懇親会
22日 於学士会館

12月

- 第3回チャリティ・バザー 5日 於センター
- 実践的ひきこもり対策講座 20日 於筑波大学



創立 30 周年の記念式典・懇親会

発行・公益社団法人 青少年健康センター

〒112-0006 東京都文京区小日向 4-5-8 三軒町ビル 102 TEL: 03-3947-7636 / FAX: 03-3947-0766
<http://skc-net.jp> E-mail: info@skc-net.jp